



家康公の今川家人質時代

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなかり



臨濟寺。賤機山の南麓に位置し、雪斎長老が妙心寺の大休和尚を招いて開山とした禅宗寺院。幼い家康公が雪斎を師として学んだと伝えられる。

天文十八年（一五四九）、家康公の父・広忠が亡くなり、松平家を主と仰ぐ三河武士たちの苦難の時代が始まります。

その年、今川勢は織田勢との合戦で織田信秀の子である信広（信長の兄）を捕らえ、織田家に人質となっていた家康公と交換されることになりました。八歳の家康公は交換の途中に城主不在の岡崎城に立ち寄り、家臣たちの涙に送られて今川家の本拠地である駿府へ行きます。そしてそれから十九歳まで十二年間にわたって駿府で成長しました。

この今川家人質時代は、三河松平の若き当主として、今川義元からは温かい扱いを受けています。義元は当時では傑出した文化人であり、武将であったと思います。家康公を今川一門格の武将に育て上げようと、臨濟寺の太原雪斎

という傑僧から高い教育を与え、義元みずから元服の儀を行いました。雪斎は僧であるとともに、義元の参謀である武人でもありました。いまも臨濟寺には、幼い家康公が使われた小さな勉強机が残っています。

しかし、駿府の武家の多くは「三河の松平の餓鬼が来た」という扱いで、それほど居心地が良いわけではありません。一番感受性の強い時代に、他国の殿様の人質という弱い立場で、馬鹿にされたり、いじめられたり、はげまされたりしたことが、家康公の人を見る目、ものを考える力に大きな影響を与え、人格形成の役に立ったと思います。

殿様の息子で周りは全員が目下という環境で育った信長と比べると、人の使い方では家康公のほうが上なのではないでしょうか。

当時の駿府は、日本中に長く続く戦国の中にあつて平和で繁栄を誇った都市であり、多くの公家衆、学僧などの知的集団が集まっていた大文化都市でありました。家康公は、その文化を吸収しつつ成長したことになります。

十六歳の時、義元の姪にあたる関口義広の娘を娶り、翌年に初陣を果たしました。今川家抱えの若き武将としてのスタートを切ったのです。

家康公は後になって、義元の墓所を通る時はかならず下馬して礼をおくり、高家として召し抱えた今川家の子孫には丁重な扱いをしています。

子供時代を過ごした駿府への愛着は強く、その後、大御所として駿府城を構え、久能山に西向きに墓を建てるよう命じて、眠りにつきました。